

# 第三者意見



九州大学大学院法学研究院  
教授

## 阿部 道明氏

CSR報告書も2年目を迎えました。昨年の報告書は、東洋経済新報社とグリーンリポーティングフォーラム共催の第10回サステナビリティ報告書賞において優良賞を受賞しており、その内容が評価されています。昨年の報告書発行以降の九電のCSRの展開としてあげられるのはまず、グループCSR推進部会が設置されてCSRの九電グループ全体への展開が加速されるとともに、九電グループCSR行動計画が策定されたことです。また、コンプライアンス行動指針が改訂されて、日常業務における留意点や問題行為の記載が加えられました。更に、前年度のCSR行動計画の実施状況を自己評価とステークホルダーの評価によって判断し、更にそれをベースに今年度の行動計画を策定するCSRマネジメントサイクルも確立されてきました。このように九電のCSRは全体として順調に進化してきていると評価することができます。

### 報告書全体へのコメント

この報告書は基本的に昨年ものを踏襲しており、CSRに対する基本姿勢と各項目の重要性を明確に打ち出すとともに、全体構成が分かりやすくまとめられていて読みやすいものとなっています。特に昨年の意見書で指摘した「経済」面でのステークホルダーへの貢献が新たに別項目で示されることになり、「社会」面と「環境」面とのバランスがとれていると評価できます。「経済」面が今回のように最後に来るべきか、むしろ最初に来るべきかは迷うところではありますが、今後の検討課題かと思えます。

また、CSRマネジメントサイクルの部分の実績についての数値とグラフ、コンプライアンス窓口・セクハラ相談窓口への相談・通報案件の数、情報公開に関するお客様満足度調査結果、お便りBOXお問い合わせ件数、人権尊重研修受講者数、育児・介護休暇・ボランティア休暇取得者の数、など報告書の随所に、数値やグラフが示されるようになったことが報告書の具体性を増して信頼性を高めることとなっています。

### CSRマネジメントサイクル

CSRマネジメントサイクルについては、上述のサステナビリティ報告書賞の優良賞受賞にあたっての講評においても、九電の報告書は「CSR活動の目標と実績の開示の充実度」が特徴であったとして高い評価を受けていますが、今年度はこれに実績を数値化・グラフ化したものを加えて更に充実させています。ただ、前年の計画とそれを受けての活動実績の各項目が個々に対応した形ですべての検証がなされているとは言えないように見受けられます。すべての項目を網羅した実績の検証は困難かもしれませんが、少なくとも計画通りに実行できなかった項目があれば反省点としてそれを指摘しておくのが良いと思われます。

### CSRのグループ会社への展開

企業活動が企業グループ全体として評価される時代において、CSRもグループ全体として展開していくことが重

要であることは前回の報告書で指摘しましたが、そのための社内組織と計画が策定されました。今回の報告書ではそれらを受けて、グループ全体としてのCSRへの取り組みと主要各社の状況がかなりのページ数を割いて説明されており、九電グループとしての取り組みがよく分かる構成となっています。

グループとしてのCSRが充実してくれば、次に目を向けるべきは、取引先を巻き込んだCSRでしょうし、また、情報セキュリティに関しては委託先の管理と指導が不可欠となってきます。これらについては、すでに昨年の報告書でも触れられていますが、今年は具体的な行動計画の中でもこれをきちんと指摘したのは評価できます。今後は、これを具体的な形で実践しそれを検証していくことが求められると思います。

### ネガティブ情報の開示と企業不祥事

この1年は電力会社のデータ改ざん・データ隠し等の不祥事が深刻な問題とされた年でした。幸いにも九電は原子力発電所の原子炉には沸騰水型を使用していないために制御棒の脱落の案件はありませんでした。ただ、他社と同様に手続きの不備やデータ改ざん等の事象が発見されており、これについては他の数件のネガティブ情報とともに報告書できちんと開示されています。一般的に言って企業不祥事には様々なタイプのもがありますが、どれもあってはならないものです。しかし、違法や不正が発見されたときにそれを隠蔽したり虚偽の報告をしたりしておいて後日それが発覚すると、問題ははるかに重大かつ深刻となります。これは過去の他社の例を見ても明らかです。逆に、発見された違法や不正を迅速に公表して適切な対応策をとることによってむしろ企業イメージが向上することもあります。この意味で、ネガティブ情報の適切な開示はコンプライアンス上で極めて重要となります。

CSR報告書がしっかり定着してきており、第三者機関からの高い評価も受けたことは喜ばしいことです。まだまだ課題はあることと思いますが、今後とも形だけのおどろりな報告書となることなく、CSRの意義とコンプライアンスの重要性を認識した実のある報告書を作成していただきたいと思っています。

## 第三者意見を受けて



九州電力株式会社  
代表取締役副社長  
CSR担当役員

## 佐藤 光昭

当社では、このCSR報告書を媒体としたステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを通して、CSRへの取組みを更に充実させていきたいと考えています。

そのためには、まず、報告書に記載した内容の客観性を

本報告書の客観性を確保するため、九州大学の阿部道明教授、九州女子短期大学の平田トシ子教授から評価を受け、ご意見をいただきました。

電力業界へのCSR（企業の社会的責任）論議においては、原子力発電所のデータ改ざん事件に絡み、本年度は一段と厳しい目が注がれています。九州電力発信の事件でなくとも、そのイメージの悪化は、どうしようもないものがあります。「九州電力は、社会の信用とお客様との信頼関係を大切にします」とトップメッセージにあります。第2回目の本年度の報告書は、「さらに意味を増す」報告書になっていることを期待して、本書を比較検討させていただきました。

### 報告書全体の印象

九州電力の思い「ずっと先まで、明るくしたい」（5頁）を実現するために、4つの挑戦はわかりやすく、説得力をもっています。殊に、3番目に掲げられている『九州とともに。そしてアジア、世界へ』はこれからのCSRの中核をなすものと思います。“九州電力方式”と命名されるような取組みが、今後期待されるところでしょう。

九州電力グループ経営ビジョン、九州電力グループ行動憲章、ハイライトと明快な導入部分に続き、22頁の『2007年度CSR行動計画』一覧表における工夫からは、九州電力の熱意が感じ取れます。

また、前年の阿部道明教授の指摘の点に対しては、早速に改善を加えたものになっていて、対応能力の高さを評価します。具体的には、53頁に見るように財務報告を関連の頁に入れ込んだ表現は、読者の理解を得やすくしています。

### 人権の尊重と男女共同参画の推進

2020年までにあらゆる領域で、女性の管理職を少なくとも30%以上にするように、内閣府男女共同参画局から努力目標が掲げられています。東京電力を含む大手企業70社が共同で2007年5月にNPO法人J-Winを立ち上げ、まさに男女共同参画に向けての行動開始にたどり着いた模様です。

これは、「国際競争を勝ち抜くには女性の登用は欠かせない」という理由から、女性を活用したり幹部に登用したりするのを支援する組織で、意識改革もさることながら、積極的に女性活用が進んでいる欧米企業の育成ノウハウや具体例を教えるセミナーも開き、さらに、幹部候補女性の人脈作りを助ける異業種交流も進めるとあります。

確保し、お読みいただいた方からの信頼を高めることが重要であると考え、昨年、九州大学の阿部教授に第三者の立場で報告書に対する評価をお願いし、そのご意見を報告書に掲載いたしました。

今回の報告書についても、阿部教授に、昨年のご意見に対する当社の対応状況も含めて再度評価いただきました。また、新たに、九州女子短期大学の平田トシ子教授にも評価をお願いしました。それぞれ独自の客観的な分析により、示唆に富むご指摘や具体的ご意見・ご提案をいただきました。

阿部教授からご指摘のありましたCSR行動計画の前年度との対照については、今後、報告書への記載の仕方を分かりやすく工夫します。また、情報セキュリティの管理など、お取引先を巻き込んだCSRへの取組みについては、

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学  
生涯学習研究センター所長  
教授



### 平田トシ子氏

意欲と能力を兼ね備えた人材を、採用・登用するうえで、今まで通りのやり方では、2020年宣言に間に合うのかきわめて心配です。

採用された人材が、性別に関わらず、仕事と家庭の両立支援を受けて、働き続けることの出来る職場環境づくりの必要性は認識されてきていますが、女性採用の難しい職業分野とは言え、基本的には、共同参画の地球規模的取り組みの枠外に出ることは、全く認められないことですから、「なるほど」と実感できる積極的な取り組み活動が望まれるところです。

従業員の意欲・能力の向上を計る物差しは、労働時間の長さでも有給休暇取得日数でもなく、自らの自由時間をどのくらい持っているかで計る方式を勧めたいと思います。その自由時間をいかに使いこなしているかでみる自由時間設計学が社内的に話題になると、発想豊かな人材育成にも役立つのではないのでしょうか。お金持ちよりも自由時間持ちの方が価値の高い人生観ではとの見直しの下に、仕事、家庭、地域活動のワーク・ライフ・バランスのとれた生活時間の軌道修正も期待されている昨今ですから、46頁の内容の充実を期待したいと思っています。

### 地域・社会との共生活動は協働から「協創」へと

九州電力は、地域・社会との共生活動として、12億5千7百万円の経済的支出をしていますが、「協働」という観点からはどのようになっているのでしょうか。さらには、その「協働」の中から、地域振興・スポーツ・社会福祉・地域環境保全・国際協力など文化の香りのする「協創」の産物が、誕生することを願っている一人です。

ところで、CSR報告書については、CSRの年次重点課題を取り決めて、その分野の報告の頁を増量し、より充実させるというやり方も満足度を増すことだと思います。あれもこれも均等に羅列するのではなく、強い意思を持って取り組んだCSR報告書になって欲しいと思います。

今後、具体的な施策を推進し、都度、検証を行います。

平田教授からご指摘いただいた「女性の活躍支援」や「仕事と生活の調和に向けた取組み」に関しては、報告書にも記載のとおり、今後、その推進体制を整備し、具体的な施策を検討、実施していきます。また、地域との共生活動についても、今後、支店のマネジメント体制を構築し、地域の皆さまとの積極的な協働により、地域に根ざした活動を展開していきたいと考えています。

なお、両氏から評価できる点としてお挙げいただいた内容については、今後も継続するとともに、一層充実させるよう努めます。

今回いただいたご意見を受け、当社のCSRへの取組みを更に充実させるとともに、その内容については、次回の報告書に掲載し、皆さまのご意見を賜りたいと考えています。